派遣隊員レポート
協力の中の青春　Vol.22

北村　拓也（きたむら　たくや）
平成２０年度１次隊　理数科教師　セントビンセント

みなさん、はじめまして。
２０年度１次隊で理数科教師として派遣されました北村拓也と申します。青年海外協力隊として派遣されるまで、まさか私がこのような投稿をさせていただくとは想像もしていませんでした。派遣前は、県内の公立高校の教壇に立っておりました。

皆さんは『セントビンセント』という国をご存じでしょうか？おそらく多くの方にとって、ほとんど馴染みのない国ことと思います。私自身も派遣が決まるまではどこにあるのか全く見当がつきませんでした。『セントビンセント』の正式国名は『セントビンセント及びグレナディーン諸島』と言います。カリブ海東南部に浮かぶ小さな島国です。カリブ海と言えばキューバやジャマイカなどが有名ですが、セントビンセントはもっと南、南アメリカ大陸にほど近いところにあります。とても小さな国なので、世界地図や地球儀でこの国を見つけるには、虫眼鏡が必要かもしれません。気候は常夏で、今年のクリスマスは人生で初めてポロシャツで過ごしました。

その南国の島国で、現在地方のセカンダリースクール（中学１年生～高校２年生）で、一教師として生徒達に数学を教えております。こちらの生徒もやはり数学と言う教科は嫌いな科目のようで、日々教えることの難しさを改めて痛感しています。色々と新しい発見はあるのですが、その一つに定期考査で先生が問題を配布後、まず問題文を読まれることです。初めは何故か分かりませんでしたが、実際に自分が授業を担当して教えたり、試験監督をしたりするとその意味がよく分かりました。正確なデータではありませんが、セカンダリースクールと言っても中央のトップ校以外は半数以上の生徒は文字が読めません。またほとんどの生徒は英語が話せません。これは私にとっても予想外のことでした。

サマースクール

中南米の地域では、一般的にスペイン語が使用されていますが、ビンセントの公用語は一応英語になっています。ここで『一応』と記載させていただいたのは、実際現地の人たち（ビンシー）が使っているのはダイアレクトと呼ばれているブロークンイングリッシュです。私達が知っている

中学・高校で習ったブリティッシュイングリッシュとは全く別の言語だと言っても良いかと思います。一例を挙げさせていただくと『Pah ya go』と言う言葉の意味、皆さん分かるでしょうか？もちろん、これは話し言葉の音を文字にしたものなので正式な書き言葉ではありません。正解は、『Where are you going?』（どこにいるの、むかってるの？）。どうでしょうか。初めてこちらに来たときには全く分かりませんでした。こちらで普通に使われています。学校現場などの公の場所では『英語』を使用するというのが原則ですが、地方になればダイアレクトしか話せない人もたくさんいます。

ホームルームの生徒

さて発展途上国と言う言葉を聞くと『食べ物がない・インフラが整備されていない』などのイメージがどうしても先行してしまいます。しかし、それは全くの先入観でした。ビンセントでは生活を送る上で物は豊富にあります。トロピカルフルーツは食べ放題です。野菜市場に行くといろいろな野菜や果物が売られています。特にマンゴーは絶品です。シーズンともなれば、あちこちでマンゴーがなっており、道端で拾うことも珍しくはありません。また、こちらの主食というと『チキン』です。町のいたるところでチキン＆ブレッドが売られています。朝からチキンフライを食べるなんてことも珍しくありません。一日の食事のうち、必ず一度はチキンを食べています。反面、野菜を食べる習慣があまりありません。食生活に関する意識はとても低いといえます。

課外活動（ネットボール）

インフラに関してもこちらはすごく整っています。携帯電話は普通に使っていますし、冷蔵庫・テレビ・PC などの家電も揃っている家庭がほとんどです。iPod、PSP などもあり、逆カルチャーショックを受けました。電気・水道なども整っており、それほど不便を感じません。もし日本と違うとすれば、月に2～3度は停電や断水があることくらいでしょうか。

日本文化紹介（傘踊り）

では何が『発展』途上国なのでしょうか？それは、人々の『意識』の低さだと思います。確かに生活面、特に物資などのハード面ではほぼ先進国に近づきつつあります。しかし、それはあくまでも先進国からの援助で成り立っているものです。それを当然のこととととらえている人たちが多いのが実情です。まずは人々の意識を変えても

らう。すなわち自分たちが何とかしよう、国を豊かに変えようなどの向上心をビンシー達に持ってもらうことが今、必要だとひしひしと感じています。そうでなければ、本当の意味で発展途上国からの脱却は不可能だからです。その意味においても教育分野の支援は必要不可欠です。こちらに来て、私自身の意識も変わりました。私の活動を通じて生徒達に伝えていきたいこと。それは『これからのビンセントを担うのは君たちなんだ』ということです。